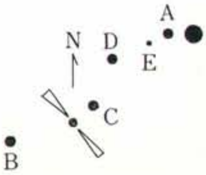
月報アルバム

カッパーとスコルピオ X1

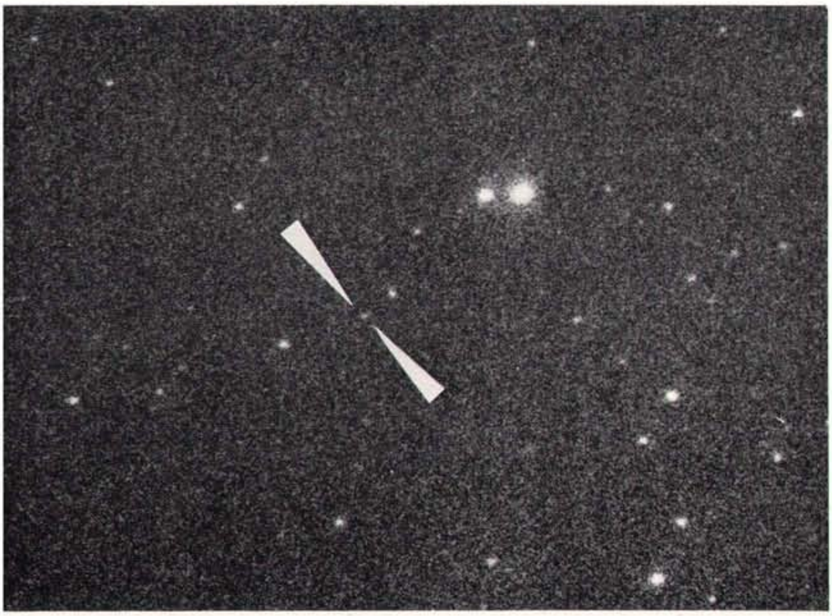
（右）東大宇宙航空研究所の K―9M―27 号機の打上げを鹿児島市のラサール高校から，200mmF/3.5 レンズにフィルター L 39 をつけ，SSS フィルムで撮影，二段目ロケットが画面中央附近の薄雲の中で点火されてわずかに飛角が変化している．1969 年 8 月 7 日 21 時 15 分（撮影・香西洋樹氏）

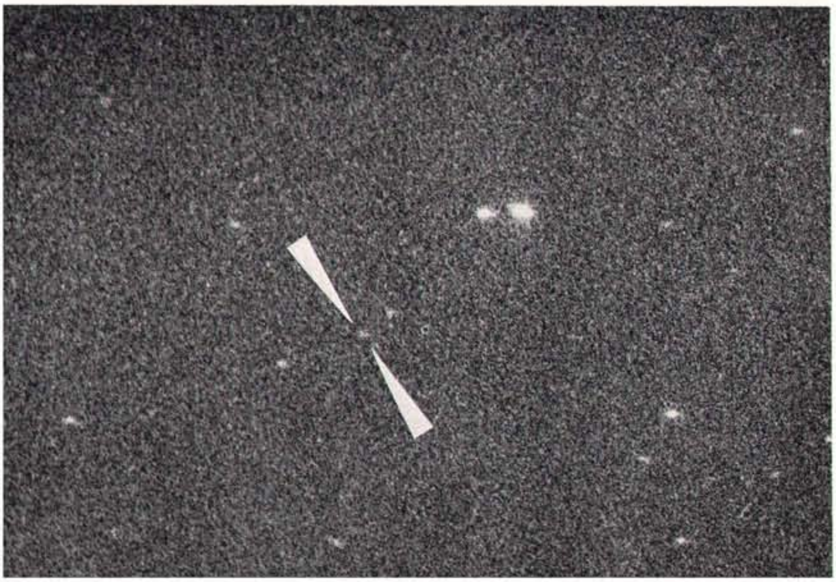
（下）さそり座の X 線星 Sco-X1 を，f=50 センチ，F/4.8 カメラに FLOII+L39 で撮影，ロケット打上げ日の 1969 年 8 月 7 日 $20^{h}22^{m}$ から $21^{h}02^{m}$ まで露出，約 13.0 等 (B)．下は 1969 年 8 月 1 日 $21^{h}01^{m}$ から $21^{h}21^{m}$ まで露出，約 12.3 等 (B)



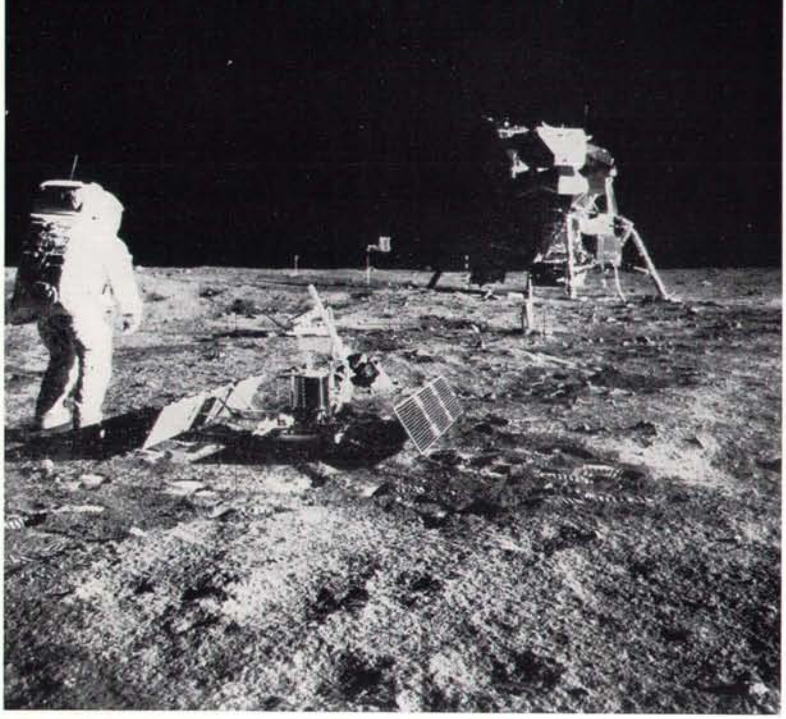
比較星等級

A＝10.2
B＝12.1
C＝12.6
D＝13.1
E＝14.2





アポロ11号が持ち帰った月の石



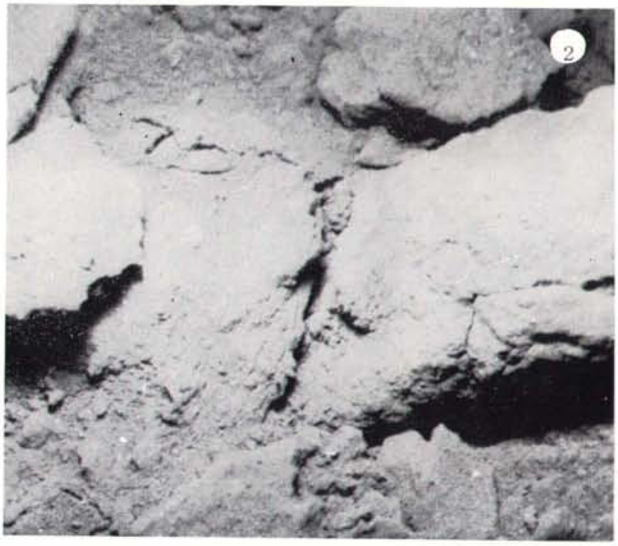
① 粉状の月面にある小石状のかたまりは直径１センチ２ミリ位でその上にガラス質の粉でおおわれているが，科学者達は何か溶けた物質がその石の上にかぶさってかたまったのだろうと推定している．

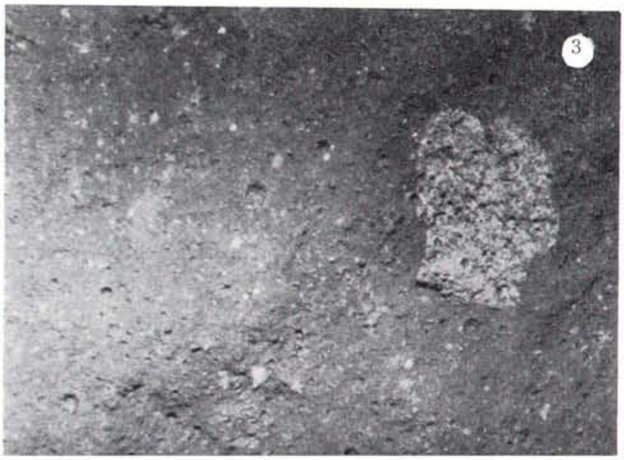
② 月面の粉状のもののかたまりでさまざまな色がまじっており，非常に多くのキラキラ光る球状の粒子が見える．

③ 破片がうめこまれたような岩石の表面で，そこだけ違った色をしている．その部分は直径１センチ９ミリ位で，表面にはいくつかの小穴が見えるが大体が３ミリ以内の小さなものである．ガラス状に光っている．

④ 粉状の月面にうまっている大きさ６センチ４ミリ程度の岩石，写真から浸食作用があることがわかる．表面に見える小穴は３ミリ以内のもので，小さな粒子が高速で衝突してつくられた穴であることを物語っている．

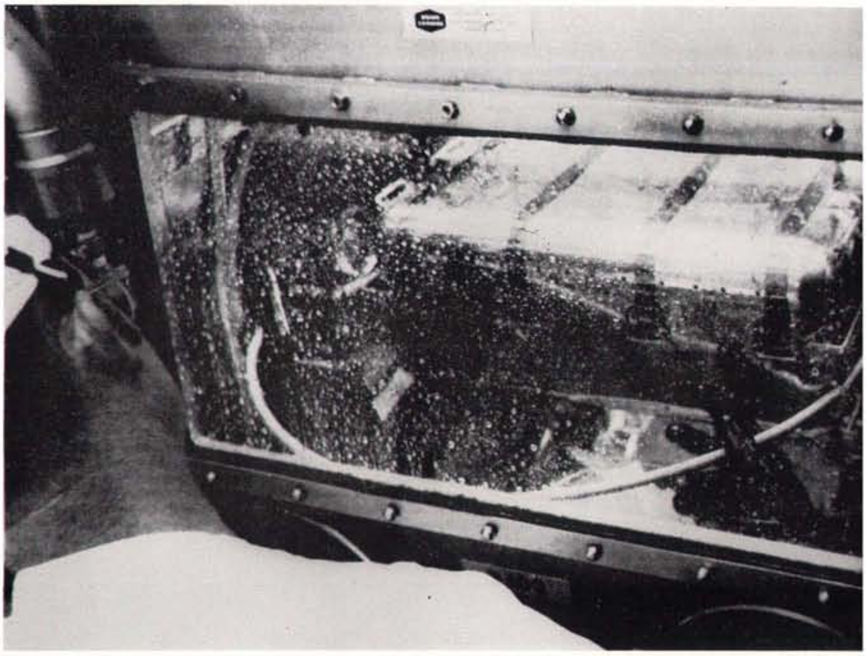
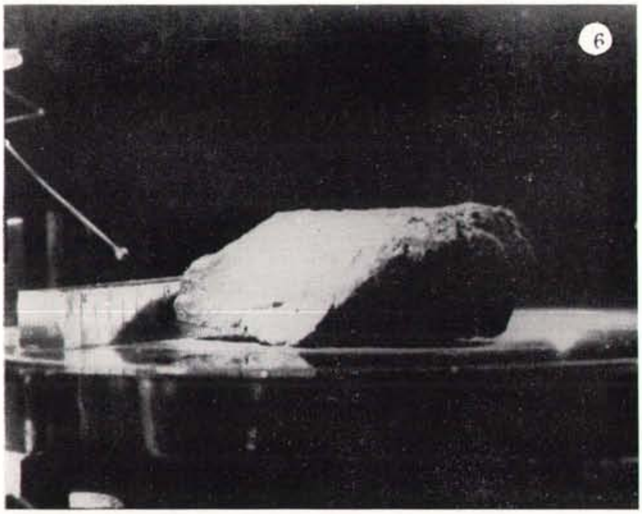
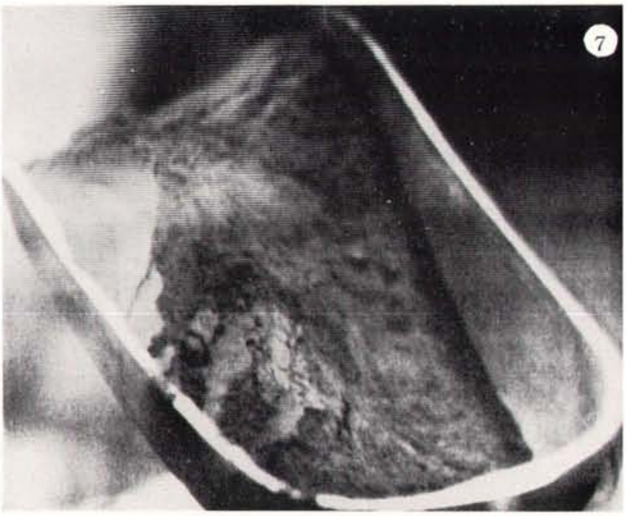
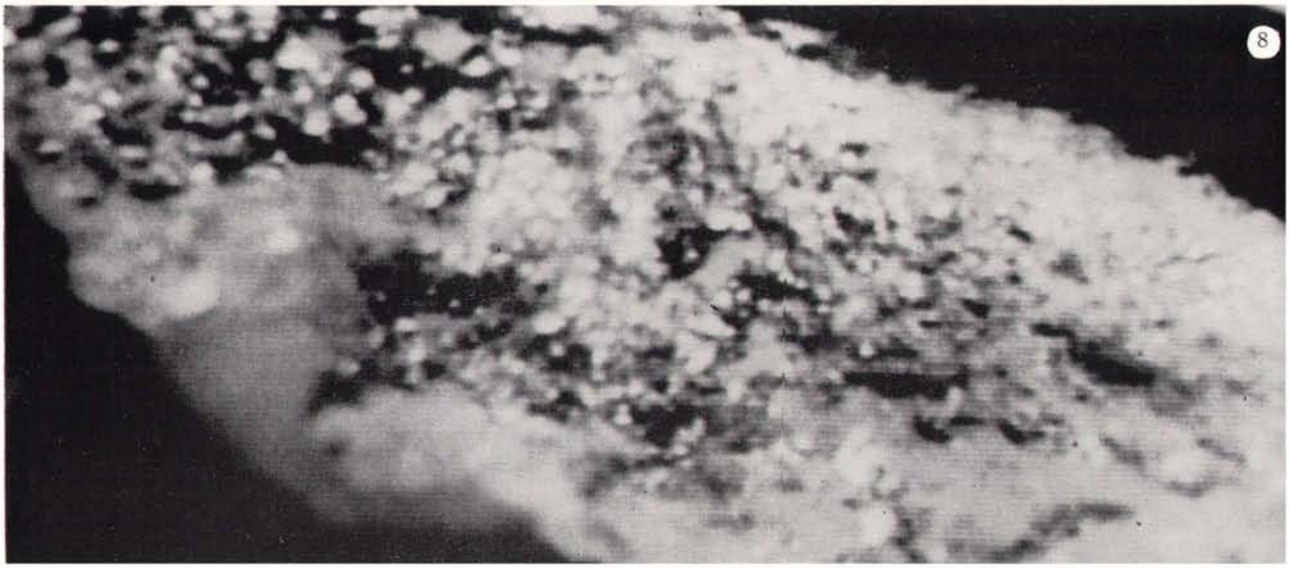
⑤ アポロ11号が持ち帰った月の岩石などの入っている箱を開ける前に酸性のもので洗っているところ．





⑥ 月の岩石：持帰ったサンプルの一つで大きさは7.5×5×2.5センチ，調査の段階ではあるが火山活動によってできた火成岩の一種であるという．

⑦ 月のちり：ヒューストンの研究所でスコップに入れた月のちりをテレビカメラがとらえたもの．砂状の物質で持ち帰った2番目の箱に入っていた．

⑧ 月の結晶体：持ち帰った岩石の表面のちりをはらいのけたら結晶が現われた．軽い鉱石のようで，一部は淡紅色に輝くガラス質の部分もある．地質学者は地球上では全く見られない独特のものであるといっている．

(提供：アメリカ大使館 USIS)